2019年 冬号

僧　伽

第104号
僧伽編集委員会
〒921-8031
金沢市野町２丁目32-4
徳法寺内
TEL（076）241－5219
題字　本多　千翠

霊域を敬い、尊び、崇め、支持し、そうして以前に与えられ、以前になされた、法に適ったかれらの供物を廃することがない。
ヴァッジ人のための七箇条の一つ
『大パリニッバーナ（大いなる死）経』

『大パリニッバーナ（大いなる死）経』お釈迦さまの最後の旅を記録した経典。

墓地と仏教

徳法寺　杉谷　淨

上の写真は、昨年九月に福島県の浪江町を訪れた時に撮った写真です。東日本大震災から七年以上が過ぎていますが、津波によって倒された墓石がそのままの状態でした。

仏教の生まれたインドは、輪廻転生という思想ですので、先祖の霊という発想はありません。また、河や海へ散骨が一般的であるため、墓地もありません。ですから、墓参りが仏教と結びついたのは中国に伝わってからです。

インド仏教では、お釈迦様の骨である仏舎利を塔に納めて礼拝の対象としていました。最初八か所に分骨されていた仏舎利は、アショーカ王によって八万四千にも分けられ、インド各地に仏舎利塔が造られたとされています。仏教と共に仏舎利も日本に伝わります。五重の塔などがこの仏舎利塔になります。明治時代にはタイ国王から仏舎利が送られ、名古屋の日泰寺に奉られています。この仏舎利に対する礼拝の習慣が日本の先祖供養という習慣と重なり、日本の仏教にとって墓参りは欠かすことのできないものとなっています。

但し、仏教伝来以前の墓参りが、先祖霊に願を掛けたり祟りを静めることを目的としていたのに対して、仏教での墓参りは先祖に対して感謝を奉げることを目的とするようになりました。これは、仏舎利塔が釈迦に対する感謝を伝えるためのものであったことに由来します。

残念ながら、浪江町の墓地はいまだに先祖に対して感謝を伝えられるような状態になってはいません。一日も早く、家族で先祖に手を合わせることができる日が来ることを願っています。

大窪康充

死んだらどうなるのか

ある坊守さんが、友だちから次のように言われた。「死後の世界を誤魔化して今を生きるというのはあまい。真宗はもっと、死んだらどうなるかを明確に示すべきだ」と。

確かに宗教は、死後の世界と切り離すことはできない。ただそれが、実体的な来世への生まれ変わりを想定したものならどうだろう。「善因善果」・「悪因悪果」による輪廻転生説にもとづいて、現世で善行を積み、死後により善い来世を期するものならば、それは私だけの救いに止まる自己保全であり、今を生きているとは言えない。なぜなら今起きている問題を誤魔化し置き去りにすることによって、目の前にある苦しみから逃れようとしているからだ。

本来、仏教は、生まれたことそのものを苦しみと捉える。それ故、苦しむことが生まれた証であり、逆に死に切ることは苦しみから解放されることである。死後、苦しみから解放される浄土への方向が定まっていれば、現世を生きる私たちは、安心して悩み戸惑いながらも、一度限りの人生を自分らしく完結することができるのだ。

様々な苦しみを乗り越えてきたご門徒の言葉である。「私にはあの世で待っている人がいるから、正直に言って、死はあまり怖くない。だけど体の弱い孫のことが心配でね……」。ここでいう「あの世」とは、実体的な理想郷を想定したものではなく、「この世」で大切な人に出遇えたという満足と共に、他者への温かい眼差しが生まれるところだ。そんな安心感からか、もう私の来世をいのる必要はなく、ただあるのは、私が浄土へ帰ることによって後の人々に受け継がれる後世だけである。

死んだらどうなるのか。後世をいのる念仏の声となって、後の人々を確かな方向へと導くものになる。その確かな証を得るためにも、この私自身が、浄土へ帰られた人々の〝いのり〟のど真ん中で、過去・未来・現在の三世を貫く今この瞬間を生きているを忘れてはならない。

自己紹介
大窪　康充
おおくぼこうじゅう
一九六五年石川県白山市生まれ。真宗大谷派浄土寺住職。大谷大学大学院博士後期課程満期退学。真宗大谷派擬講。金沢教区教学研究室元室長。金沢真宗学院指導。
著書　『浄土を生きる足音』（北國新聞社出版局刊）『念仏の音が聞こえるとき』（法蔵館）

『心の相談室』

毎月第四土曜日
午後三時～五時
東別院横
「いちょう館」二階
相談無料

日常生活でのいろいろな悩み、家族のこと、友達のこと、学校のこと、仏事の疑問等を、僧侶がお聞きします。

杉谷淨のラジオ案内

二月五日（火）
三月五日（火）
FM-N1（七十六・三MHz）で午後一時半から一時間放送します。番組名は「生活一番シャトル便　住職のよもやま話」です。再放送は放送日の午後十一時と土曜日の朝七時からの二回です。インターネットでも聞けます。

真宗人物伝

第四十六回

徳法寺　杉谷　淨

唯仏

今回は親鸞聖人の弟子で、関東二十四輩の第二十一番である唯仏です。

唯仏の俗名は藤原隼人佑頼貞といい、那珂郡枝川村（現茨城県ひたちなか市枝川）の住人でした。親鸞聖人が稲田草庵に居住していた時に弟子入りし、唯仏房浄光という法名を賜ります。自らの館を吉田御坊という開法道場としましたが、この道場が現在の浄光寺となりました。寺の場所は領主が変わる度に転々としましたが、徳川光圀の養女が浄光寺に嫁いだ時寄進を付けた、現在のひたちなか市館山に移転し今に至ります。

この寺は、本願寺四代門首である善如上人が十四歳の時から三年間住職をしていたことでも知られています。本願寺三代門首覚如上人が仲違いした長男存覚上人に本願寺を後継させなかったことから、この寺に養子に来ていた次男従覚上人の子である善如上人が本願寺に呼び戻されたのです。このため、この寺には善如上人の御影が安置されています。

この寺には「鹿島明神の親鸞聖人御真影」という不思議な宝物が伝わっています。『浄光寺縁起』によると、鹿島神宮の祭神である鹿島明神を、親鸞聖人が信海という法名を授けて弟子としました。この信海が親鸞聖人の尊像を求めたため、親鸞聖人は自らの姿を刻んで贈られたそうです。この親鸞聖人像は長い間、鹿島神宮に安置されていましたが、神前に僧の姿を安置することを嫌ったある神官が地中に埋めてしまいました。埋められた親鸞聖人像は毎夜光を放ったそうです。このことを聞きつけた水戸光圀公が、浄光寺の門徒であった飯塚喜兵衛に掘り出させます。光圀公は飯塚喜兵衛の願いを受けて、この親鸞聖人像を浄光寺に納めたそうです。

親鸞聖人が鹿島神宮に参詣していたことは広く知られていました。鹿島神宮に多くの仏教経典が納められていたためであるといわれています。当時は今のように寺院と神社の間に明確な違いがなかったのです。このお話が作られた江戸時代の頃には、神社を仏教から分けようという国学という思想が強くなってきます。特に水戸は水戸学と呼ばれる国学発祥の地で、多くの寺院が弾圧されました。このため仏教側も神社と距離を置くようになります。このことが原因となり、親鸞聖人が鹿島神宮に参詣していたことを面白く思わない人がいたのでしょう。そこで、鹿島明神が親鸞聖人の弟子であったことにしてしまったようです。

またこの寺には、雑賀衆（さいかしゅう）の鈴木一族の墓もあります。雑賀衆は大坂本願寺が織田信長と戦った時に助力を得た鉄砲傭兵集団です。鈴木重秀は、雑賀衆の有力者の一人であり、下間頼廉と並んで「大坂之左右之大将」とまで称えられた人物で、本願寺門徒であったことでも知られています。大坂本願寺が信長に敗れた後、本願寺はこの雑賀衆を頼って雑賀の鷺森に移っています。本願寺が勢力を失って後、鈴木一族は織田信長に仕えますが、本能寺の変の後、今度は豊臣秀吉に仕えます。この頃当主は重秀から重朝に変わっています。豊臣が滅ぼされると、伊達政宗の家臣となり、更に正宗の仲介によって家康の直臣となり、その後水戸徳川家の旗本として浄光寺の檀家となります。重朝は水戸の地で最期を迎えています。跡を継いだ重次は、水戸藩主徳川頼房の十一男を養子・鈴木重義として迎えたため、鈴木家は水戸藩の重臣として続きました。この頃、姓を鈴木から雑賀に代えています。

本願寺と信長との戦や、仏教と国学との対立などに興味のある方は一度訪れてみてはいかがですか。

徳法寺のホームページのご案内

「僧伽」のバックナンバーや報恩講、春秋彼岸の案内、お講の案内、学習会のレジュメ、交流広場などを載せています。アドレスはhttp://tokuhou-ji.com/です。是非覗いてみてください。

真宗豆知識

浄土教と禅

日本の伝統仏教は、律宗や法相宗などの奈良仏教、天台宗や真言宗などの平安仏教を経て、鎌倉時代に日本独特の仏教として花開きました。これを鎌倉仏教といいます。浄土真宗も鎌倉仏教の一つです。

鎌倉仏教は浄土教系、禅宗系、日蓮系に分けることができます。この内、浄土教と禅は中国で生まれた仏教で、日蓮の教えは日本独自のものです。中国仏教では、念仏と禅は一つの教えとして伝えられ、日本のように浄土教が宗として独立することはありませんでした。

現在、日本の浄土教系宗派には、浄土宗や浄土真宗などが、禅宗系宗派には臨済宗や曹洞宗などがあります。同じ浄土教や禅でも、宗が違えば教義も微妙に違っています。逆に、浄土教と禅では教義が全く違っているように思えますが、中国では一つの宗派になっていますから、共通するところも少なくありません。

同じ鎌倉仏教の祖師である親鸞聖人と曹洞宗の道元禅師は度々比較されています。親鸞聖人の説かれる仏教は、我執を離れることのできない自分を凡夫であると知り、阿弥陀如来に廻向された信心に帰依することで救われるというものです。

一方の道元禅師は『正法眼蔵』の中で次のように述べておられます。

ただわが身をも心をも放ち忘れて、仏の家に投げ入れて、仏の方より行われて、これに従いもって行く時、力をも入れず、心をも費やさずして、生死を離れ仏となる。

禅というと、自分の努力でさとりを得るように思われがちですが、実は自分の心を離れて仏に身を任せることによって悟りを得るというものです。この発想は、自らの迷いの存在として自覚するところから始まっています。こうしてみると、念仏によって仏に身を任せるか、禅によって仏に身を任せるかの違いでしかないようにも思えます。

もちろん違いもあります。親鸞聖人の仏が、慈悲を強調する阿弥陀仏であるのに対して、道元禅師の仏は智慧を強調する釈迦仏です。ここから、浄土という社会を見据える念仏と、個人の救済を重視する禅という違いが生まれてきます。

室町時代の僧である臨済宗の一休宗純や江戸時代の曹洞宗の僧である良寛の中は、いずれも禅僧らしくないことで知られています。このお二人の世間に対する慈愛のまなざしからは、禅宗の達観というよりも浄土教の慈悲に共通するものがみられます。

同じ仏教なのですから共通するところが多いのは当たり前ですし、同じ宗派であっても歩んできた人生が違えば同じ考え方になるはずもありません。違いを非難し合うのではなく楽しむぐらいの余裕があればちょうど良いのかもしれません。

（浄）

平成三十一年 年忌法要のご案内

一周忌	平成三十年死亡
三回忌	平成二十九年死亡
七回忌	平成二十五年死亡
十三回忌	平成十九年死亡
十七回忌	平成十五年死亡
二十五回忌	平成七年死亡
三十三回忌	昭和六十二年死亡
五十回忌	昭和四十五年死亡

本の紹介

『往生と成仏』に見られる曽我教学の晩年（1）

西山　彰

曽我量深と言えば、金子大栄とともに、近代真宗教学を牽引した大谷派の巨人である。

今、私の手元に『往生と成仏』という一冊の書籍がある。両氏が生前に岡崎教区で講演された際の記録である。昭和四十三年初版となっているので、おそらく昭和四十年代初頭に行われた講演であろう。ちなみに曽我氏は昭和四十六年に九十五歳で示寂しておられる。

昭和四十年代初頭と言えば、西暦では一九六〇年代後半に当たる。したがって、ここで語られている真宗の教えは、多少古いと言えるのかも知れない。しかし、ビートルズが来日し、日米安保反対の学生運動が盛んであったころであることを考えると、そう昔の話でもない。

さて、この本からは当時曽我氏や金子氏がどのような立場から発言しておられたかを知ることができる。この本の中の曽我氏の印象は、私たちが知る近代教学のカリスマとしてのそれとは違っている。ひたすら真宗教学の将来を憂う念仏者の姿がここにある。

以上のことを踏まえて、この本を読み進めていきたい。

漢文には「当」という再読文字がある。「まさに……すべし」と読む。辞書的には、「きっと……するだろう」という「確信を持った推量」の意である。

ここから派生した言葉であろう。真宗には「当益（とうやく）」という言葉がある。「来世において必ず受けるであろう利益（りやく）」のことである。この言葉に対し「現益（げんやく）」という言葉もある。これは「現生における利益」のことである。これら二つを合わせて「現当二益」（げんとうにやく）という言い方をする。最近ではめったに使われることがなくなったが、念仏のご利益を表す伝統的表現である。

曽我氏はこの「現当二益」について、独特の所見を語っておられる。

往生と成仏を混乱して、往生は現生に達するんだから、成仏も現生に成仏するんだとするところから一益法門というものが起こってきた。だから一益法門を退治するには、往生と成仏の義門を明瞭にすべきであります。往生は現生に得る益、信の一念に往生が決定する。決定的往生者である。

（曽我『往生と成仏』）

氏の主張の内容を分かりやすくするために、次の三つのキーワードを押さえておきたい。

①住正定聚（じゅうしょうじょうじゅ）…往生が正しく定まり必ずさとりをひらくことができる人々のことを正定聚という。住正定聚とはその位に付くこと。

②往生（おうじょう）…浄土に生まれること。つまり覚りを開くのに最もふさわしい場に生まれ変わること。

③成仏（じょうぶつ）…覚りを開き仏になること

氏は、現益に**②往生**を、当益に**③成仏**を当てはめておられるのである。これはたいへん大胆な主張であった。つまり生きている間に浄土に生まれた者が、死後仏になると説かれたのである。それは「往生は心にあり、成仏は身にある」という氏の有名な言葉に象徴されている。つまり、往生は生きている間のことであるとする了解であり、それは「即得往生」（そくとくおうじょう）という言葉とともに広く知られることになった。

ところが、曽我氏はこの講演において「即得往生」という言葉をまったく使っておられない。この語に代わるものとして「決定往生」（けつじょうおうじょう）という語を多用しておられるのである。この事実は晩年の曽我氏の思想の微妙な変化を表わしていると思われる。

（次号に続く）

『サンガ茶話会』

毎月第一木曜日
午後三時～五時
東別院真宗会館内
囲炉裏の間

お茶とお菓子をいただきながら、お坊さんと気楽にお話できる空間です。相談というほどではないにしろ、ちょっと聞いてみたい、いろんな人と話してみたいという方大歓迎です。もちろん無料です。お気軽にご参加ください。

映画の紹介

「ボヘミアン・ラプソディ」

（二〇一八年アメリカ映画）

〝これは現実なのか、それともただの作り話か〟

クイーンの名曲「ボヘミアン・ラプソディ」の冒頭は、こんな歌い出しだった。そしてこれが、同名の映画を観た直後の私の感想だった。

クイーンは、七十年代後半に彗星のごとく現れたイギリスのロックバンドである。このバンドの中心的メンバーであり、ボーカリストであったフレディ・マーキュリーの自伝的映画が、最近話題になっている。

数々の音楽賞に輝いたクイーン。左から二番目がフレディ・マーキュリー

デビュー当時の彼らの音楽に魅了された私は、中学、高校時代を通してその音楽を聴いて育ったと言っても過言ではない。しかし、当時日本におけるこの新人バンドの評価は大きく分かれていた。特に、渋谷陽一は優れた評論家であったにもかかわらず、終始このバンドに対する冷ややかな態度を崩さなかった。

印象的だったのは、渋谷が自ら主宰する音楽雑誌「ロッキングオン」に書いたクイーン評だった。このバンドが聴衆に要求するのは、「リッスン（聴け）」のみであると彼は書いていた。音楽なんだから当たり前のようだが、ロックとは本来聴衆参加型の音楽である。ロックミュージシャンが舞台から叫ぶのは、「カモン、レッツゴー」であって、決して「リッスン」ではないと言うのだ。常に聴衆とともにあるべきだというのが渋谷の持論で、それを体現しているのは、すでに大御所の地位を獲得していたレッド・ツェッペリンだった。

確かに彼らの曲は、デビュー当初から付け入る隙がないほど完璧で、聞き手の勝手な思い入れなど一切拒絶するものだった。しかし、俗世間からかけ離れた壮大なサウンドは、天空で奏でられる音楽であるかのように崇高だった。

そんな音楽を渋谷は、「ファシズム・ロック」と評した。今思えば、彼のこの言葉が、良くも悪くも初期のクイーンの本質を言い当てているように思える。

一方彼らは、代表作「オペラ座の夜」発表以後、大きく音楽性を転換した。よりポップになり、俗化していった。いい意味で大衆化したのだ。それを見て、ファンの多くは裏切られたと思い落胆したものだった。

映画では、彼らの音楽的志向の変化が、そのままフレディの心の成長として描かれている。彼は天才的音楽家であると同時に、孤独な人だった。そして、誰よりも愛されることを求めてやまない一人の人間だった。そのフレディが、苦難を乗り越えて本当の愛に目覚めていく。あらすじだけを言えばこんな感じだが、若干出来すぎている観もある。

〝これは現実なのか、それともただの作り話か〟

フレディ・マーキュリーは一九九一年、才能を惜しまれながらエイズで亡くなった。享年四十五才だった。

（彰）

各寺のご案内

◆常　徳　寺

金沢市寺町
五丁目一番二九号
TEL二四一―二六四九

◎春彼岸法要
三月二十一日（祝日）
午後二時より

◆徳　法　寺

金沢市野町
二丁目三二―四
TEL二四一―五二一九

◎徳法寺仏教入門講座
インド仏教史
三月～十一月の二十一日
午後七時半から
三月
第三章仏教の変遷一
「原始仏教の形成」
四月
第三章仏教の変遷二
「部派仏教時代」

◎春彼岸
春彼岸中川学イラスト展
三月十六日（土）～
二十四日（日）

◎春彼岸中日及び
永代経法要
三月二十一日（祝日）
午後二時より
講師　藤原　恵師

編集委員
西山　彰（常徳寺）
杉谷　淨（徳法寺）